

《題目》管理職になった時の先輩の言葉 その 1

前回のコラムが少々長かったので、今回は短めに！入社後、何年後かは忘れましたが、係長に昇進しました。直属の上司は女性だったので、彼女から言われた事でないことは覚えていますが、正直言って誰から言われたのか覚えていません。言われた際には、それほど重要な事だとは思いませんでしたが、実際に、部下を持ち、問題に対応し、他の管理職がやっていることを見ていくにつれ、その言葉を思い出し、その後、60 歳で第一線を退くまで、これを実践しました。

その言葉とは、『自分の部下の内、どのような部下であれ、「あいつはダメだ」とか「あいつには能力が無い」と言ったとしたら、それは「私には管理職の能力がありません」と自分で言っていることだ』であり、『どのような人間であっても、それぞれ個性があり、個々に優れた能力があるはずだ。各人の能力を引き出してやるのが、管理職の仕事である』ということでした。

ブリストル時代で係長、バイオ・ラッド時代で課長代理から部長まで、百名強の部下を持ちましたが、それはそれはバラエティーに富んだ人達が私の下で働いてくれました。思い出深い部下を全て書くと何回にも渡って書く必要がありますので、特に問題があった 2 名の特長について書かせて頂きます。というのは、私の信条として元日本海軍連合艦隊司令長官山本五十六元帥の『やってみせて、言ってみせて、させてみて、ほめてやらねば、ひとは動かじ』です。私の力量というか、能力からして、山本五十六元帥の 1 割でもできれば上出来だったと思いますが、少しでも近づければと思って管理職を務めておりました。

.....次回に、この続きを掲載致します。